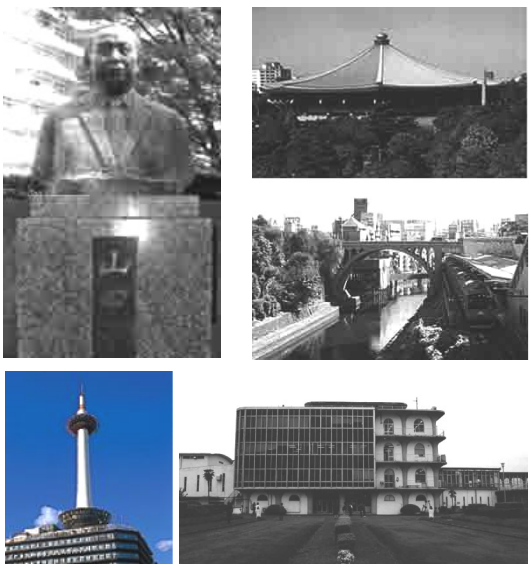
建築家「山田守」の現存する設計図面について

大宮司　勝　弘

1 はじめに

1-1 研究の目的

山田守（1894-1966・図 1 左上）はよく知られたわが国の近代を代表する重要な建築家の一人である。一般には「聖橋（1927・図 1 右中）」,「日本武道館（1964・図 1 右上）」や「京都タワー（1964･図 1 左下）」の設計などで有名である。2003 年には日本建築学会において,「日本の DOCOMO（20 世紀のモダン建築）100 選」が選定されたが,山田の作品も「長沢浄水場（1957・図 1 右下）」と「ＮＴＴ九州病院（旧熊本逓信病院）（1955）」の 2 点が選ばれている。また，若き日の東京帝国大学時代には学生仲間で分離派建築会を興し，建築史上に大きな足跡を残している。



【図１】東海大学湘南キャンパスに立つ山田の銅像と現在の山田建築

家政学部住居学科

しかし山田を扱ったモノグラフ的な研究はさほど多くない。また没後 38 年を経過し，山田建築のいくつかはすでに解体が始まっており，現存していても近い将来解体が検討されている建築も少なくない。更に直接山田を知る人や当時の状況を知る人も高齢になっており，山田の残した資料も散逸するなど，山田の功績を建築史上に位置づけることが急がれるところである。

山田は東海大学の設立及びキャンパス計画にも関わっており，東海大学に死蔵されていた資料が大量にあることが発見された。

そこで本稿では，山田や彼に関する資料の調査及び検討を行い，現段階で整理できた資料のうち，設計図面を中心に紹介するとともに，これを分析することによって，山田の建築観を明らかにすることを試みる。

1-2 既往研究

ここで山田を扱った既往研究を紹介したい（表 1)。既往研究においては限定された作品評価や分離派建築会を通した思想的評価に留まるものが多いことが判る。

【表１】山田守に関する既往研究について

日本建築学会計画系論文集

1	・丹波和彦・小原誠／山田守と「ある電話局の草案」-大正後期の逓信省建築に関する研究その１-	1998 年 No513

日本建築学会学術講演梗概集

2	・矢作秀雄/吉田鉄郎と山田守のかかわりについて（吉田鉄郎の建築論的研究）	1980 年
3	・田辺秀樹・小原誠・田辺邦昭／山田守と「ある電話局の草案」と大正期の分離派風電話局舎	1994 年

4	・李明・石丸紀興／戦後広島における逓信省の建築家山田守の活動とその作品に関する考察-戦前・戦後広島における建築家の活動とその役割に関する研究その２-	1998年
5	・湯山正登・鈴木貴詞・落合秀一・田中真希・吉田研介／山田守研究その１ 山田守のデザインボキャブラリーのマトリックス表作成	1999年
6	・湯山正登・鈴木貴詞・落合秀一・田中真希・吉田研介／山田守研究その２ 日本武道館、京都タワーにおけるデザインソース	1999年
7	・湯山正登・鈴木貴詞・落合秀一・田中真希・吉田研介／山田守研究その３ 洋雑誌と山田作品の類似性とその関連性について	1999年
8	・湯山正登・鈴木貴詞・落合秀一・田中真希・吉田研介／建築家の意図と使用者・一般との関わりに関する研究－山田守設計の東海大学キャンパスに関する学生の意識調査－	1999年
9	・山口琢也・子浦中・岩岡竜夫／東京逓信病院にみられるデザインの特徴－山田守作品研究：１－	2004年
10	・山口琢也・子浦中・岩岡竜夫／東京逓信病院と他の山田作品との意匠的関連性－山田守作品研究：２－	2004年

1-3 研究の方法

建築家のモノグラフ研究においては，現存する建築の現地調査の他，残された設計図面や模型の分析，当時の書籍や雑誌などを通した発言や活動，所有していた書籍や旅行記録による影響の有無の分析などが考えられる。本稿においては，現存する図面の分析を実施した。

2 山田守の経歴と設計活動について

2-1 分離派建築会

分離派建築会とは，1920 年に結成された建築デザイン運動の名称である。山田など東京帝国大学建築学科の学生有志等数人で結成し，各自が計画案や実作の写真などを持ち寄り，展覧会及び作品集を企画して活動した。メンバーは当初，山田の他，堀口捨巳，石本喜久治，森田慶一，瀧澤眞弓ら同期生が中心だったが，後に蔵田周忠と山口文象が加わっている。彼等は分離派建築会としての活動後もそれぞれ建築の各分野で活躍し歴史的に名を残す業績を修めている。「分離派」という名称は，結成宣言の文頭にある「我々は起つ。現実社会圏より分離し，總の社会をして眞に意義あらしめる新社会圏を創造せんがために。（後略）」による。当時のわが国は明治以降の西欧様式建築主義の学習期を終えようとしており，技術的背景として建築に鉄とコンクリートが導入され，建築デザインの分野でも新たな方向性が求められていた時代である。（表 2）

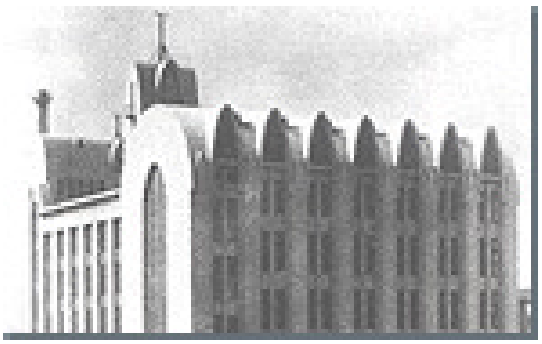
【表２】分離派建築会の活動記録

年	月	記録
1920	2	結成・習作展（大学第二学生控所）
	7	第１回展（白木屋） 「分離派建築会 宣言と作品」刊行
1921	10	第２回展 「分離派建築会 宣言と作品 第二」刊行
1922	5	関西第１回展（京都高島屋）
1923	6	第３回展（京橋 星製薬）
1924	6	関西第２回展（大阪三越）
	11	第４回展（銀座松屋） 「分離派建築会 宣言と作品 第三」刊行
1926	1	第５回展（白木屋）
1927	1	第６回展（白木屋）
1928	9	第７回展

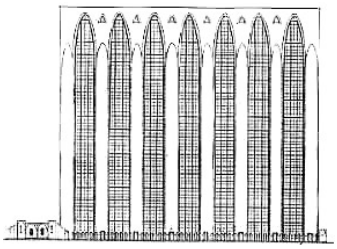
2-2 逓信省技官時代

山田は 1920 年に大学卒業後，逓信省に技官として入省する。当時の逓信省は日本各地に郵便局や電話局などの建設が盛んな時期にあり，山田も多くの設計に携わり吉田鉄郎 (1894-1956) と並んで逓信省建築家として名を残すことになる。特に有名なのは「東京中央電信局（1925・図 2)」で連続するパラボラ（双曲線）など，当時の山田の特徴を最も現していると言える。これは分離派建築会で出展された山田の理想である「あるオフィスビルの草案（図 3)」を実現したものと思われるが，当時は設計標準化を目指していた逓信省の上司との間で確執があった。

また「東京逓信病院（1937・図 4)」は戦前の



【図２】東京中央電信局



【図３】あるオフィスビルの草案
（分離派建築会 宣言と作品より）

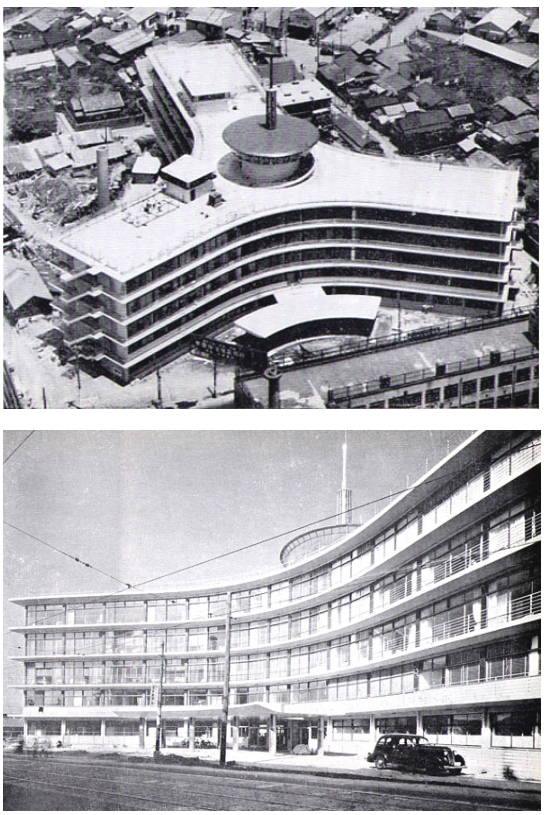
近代主義建築の金字塔と称され，当時の人々に感動を与えたが，後に建築界の巨匠に上り詰めた丹下健三（1913-2005）には「衛生陶器」と評されたエピソード*[1]があり，反響の大きさをうかがわせている。この設計を初めとして，後に山田は多くの病院建築に関わることになる。

2-3 独立・設計事務所開設

山田は太平洋戦争終戦の 1945 年に逓信省を退官し，1949 年に東京湯島に山田守建築事務所を開設，独立した建築家としてのスタートを切った。独立後の最初の作品は,「東京厚生年金病院(1953・図 5)」である。この建築の最大の特長は Y 字の平面形である。これはその後の山田建築の多くに採用された平面形で，一般的にも多く使われるようになった形だが，山田が先駆けと言えるものである。

この建築を初め，山田の建築は官公庁関係が多いのも特徴である。

【図４】東京逓信病院



【図５】東京厚生年金病院

また晩年の「日本武道館（1964）」や「京都タワー（1964）」は当時その先進的なデザインに賛否が別れ，論争[*2]になったが，今でもそれぞれが市民に親しまれ，評価されているものである。

山田守建築事務所は山田の死後も息子の達郎に引き継がれ，組織型設計事務所として，大きく成長することになる。

2-4 東海大学理事

山田は東海大学創始者の松前重義と親交が深く，学園の設立から関わっている。前身の航空科学専門学校の設立準備（1941）から始まり，その建設部分を担当し，建築だけでなく，土地，起債の問題，監督官庁との交渉など，複雑多方面に渡り尽力している。そして東海大学設立（1951）と同時に理事に就任，工学部建設工学科（現在の建築学科）の初代主任教授を兼務している。

【図６】東海大学湘南校舎計画案（青焼図）
142×70cm
（東海大学建築デザイン学科所蔵）

東海大学は 1962 年，神奈川県平塚市に湘南キャンパスの建設を始める。山田は収支度外視でこの事業に関わり，相当の思い入れを持って取り組んだようである。それを証明するかのように，キャンパス全体計画図（図 6）や構想に終わった体育館ドーム模型などが残されている。しかし，山田守は多くの校舎を完成させたものの，志半ばその全貌を見ぬまま 1966 年に没している。（図 7）

【図７】東海大学湘南キャンパス空撮
（国土交通省 1977 年）

3 東海大学所蔵の設計図面について

3-1 東海大学中央図書館貴重本庫に所蔵されている図面集

現在山田守の設計図面について山田守建築事務所に残るものは無く，また逓信省の後身である日本郵政公社やＮＴＴにおいても図面は法的に定められた期間で序脚されることになっており，残されていない。しかし教授を務めた東海大学には一部の図面や資料が残されており，今後の研究の対象とすることが出来る。現在確認したものは多く

が青焼き図面集で東海大学中央図書館貴重書庫や建築デザイン学科にある。これらは今まで東海大学学外に紹介されることは無かったものである。

【表３】東海大学中央図書館貴重本庫に所蔵されている図面集

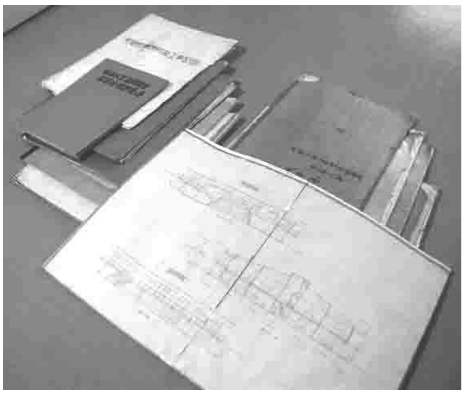
No	年代	タイトル
1	1922	大阪中央電話局（難波）
2	1923	小樽郵便局
3	1923	大阪中央電話局（本町）
4	1923	神戸中央電話局
5	1923	大阪出張所
6	1924	東京中央電信局京橋分局
7	1924	無線電信局（岩槻）
8	1924	函館郵便局
9	1924	鹿児島郵便局
10	1924	名古屋中央電話局
11	1925	三ノ宮郵便局
12	1925	金沢郵便局
13	1925	日本橋新右衛門町
14	1925	鹿児島無線電信局
15	1925	和歌山郵便局
16	1925	大阪中央電信局新築工事　設計図
17	1926	八幡郵便局
18	1926	名古屋逓信講習所
19	1926	岐阜郵便局
20	1926	天下茶屋郵便局
21	1926	名古屋中央電話局
22	1926	網走郵便局
23	1927	大阪電信局（石炭）
24	1927	釧路郵便局
25	1927	苫小牧郵便局
26	1927	東京中央電話局浅草分局
27	1927	京橋通郵便局
28	1927	千住郵便局電話事務室
29	1927	京橋通郵便局
30	1928	膳所電話中継所
31	1928	名古屋中央電話局
32	1928	大阪中央電話局南分局新築　構造計算書
33	1929	大阪中央電話局南分局
34	1929	電気試験所（大阪出張所）
35	1929	旭郵便局電話事務所
36	1929	電気試験所大阪出張所（其の他）
37	1929	旭郵便局電話事務所
38	1929	横須賀郵便局
39	1929	名古屋中央電話局新築第二期
40	1929	徳島貯金支局新築　構造計算書
41	1930	飛行場計量台其の他工事
42	1930	高麗橋郵便局新築　構造計算書
43	1931	東京飛行場事務所
44	1931	松澤郵便局電話事務室
45	1931	庄内電話中継所
46	1931	東京飛行場事務所（逓信省側）
47	1931	逓信、営２事係計算部
48	1931	岡山郵便局電話事務室新築　構造計算書
49	1932	大宮郵便局電話事務所
50	1932	東京飛行場格納庫
51	1932	旭郵便事務所
52	1933	神戸中央電話局
53	1933	久留米郵便局電話事務室新築
54	1934	宇部郵便局電話事務所
55	1934	広島逓信診療所
56	1934	熱海郵便局電話事務所
57	1934	松澤郵便局電話事務所
58	1934	東京無線電話局（岩槻）
59	1934	徳山電話中継所
60	1935	熊本貯金支局（設備）
61	1935	神戸中央電話局
62	1935	東京中央電信局
63	1935	東京中央電信局（増築）
64	1935	神戸中央電話局（設備）
65	1935	神戸中央電話局（構造）
66	1935	熊本貯金支局用搬送機設備（その 2）
67	1936	住吉郵便局
68	1936	大阪中央電信局
69	1936	電気試験所廣島出張所
70	1936	東京中央電信局岩槻受信所
71	1936	吹田郵便局電話分室
72	1936	前橋郵便局電話局
73	1936	苫小牧郵便局
74	1936	瀬戸郵便局
75	1936	廣島電話局西分局
76	1937	長崎郵便局電信試験分室
77	1937	寶塚郵便局分室
78	1937	大阪中央電話局淀川分局
79	1937	東京中央郵便局飛行場
80	1937	膳所電話中継所増築
81	1937	嵯峨郵便局
82	1938	高知航空無線電話局
83	1938	荒屋電話中継所
84	1938	沖館電話中継所
85	1938	電信電話工防に関スル設備資料　工務局(一部ナイ)
86	1939	東京中央電信局
87	1939	日本電信電話工事株式会社
88	1940	大阪逓信病院設備
89		富山郵便局電話事ム室　構造計算書
90		豊橋郵便局電話事務室新築　構造計算書
91		鶴見郵便局電話事務室新築　構造計算書
92		伊勢崎郵便局電話事務室新築　構造計算書
93		航空燈基用鐵塔　構造計算書

東海大学中央図書館においては「青焼き図面集」93 点，他写真等があり，1922 年「大阪中央電話局（難波）」から 1940 年「大阪逓信病院設備」までの，何れも全国の逓信省関係のものである。（表 3）

これらについては膨大であるゆえ，全て山田の担当によるものかは不明であるが，期間は山田の在任時期に一致しており，当時の逓信省建築を知る上でも学術上貴重な資料であるのは間違いなく，今後，調査と研究を進めていく。

3-1 東海大学建築デザイン学科に所蔵されている図面集

建築デザイン学科には「校舎毎に製本された青焼き図面集」13 点と「山田が所蔵していた 20 世紀中頃までの邦・洋雑誌」数十点が所蔵されている。このうち「青焼き図面集」について以下に挙げることにする。（図 8，表 4）



【図８】建築デザイン学科に所蔵されている図面集 13 冊

山田は日本各地に点在する東海大学校舎や施設を幾つも設計したが，ここにあったものは全て湘南キャンパス建設時に使用されたと推測されるものである。なお，現在の湘南キャンパスの建築 55 棟の中で山田守建築事務所による設計と確認されたものは 28 棟であった。

前述のように山田はキャンパス完成を見ることなく没しており，湘南校舎のすべてが山田の意図であるとは言いがたく，これらの図面を使ってどの部分までが山田の意が反映されているのかを明らかにすることは重要である。

【表４】建築デザイン学科に所蔵されている図面集リスト

No	竣工年	大きさ	枚数	工事名
1	1963	A1	32	東海大学湘南校舎新築工事
2	1964	A1	27	東海大学湘南望星学塾新築工事
3	1964	A1	70	東海大学湘南第 2 号館新築工事
4	1966	A1	16	東海大学湘南研究実験館H棟新築工事
5	1966	A2	32	松前会館新築工事
6	1966	A1	19	東海大学湘南湘南武道館新築工事
7	1966	A1	16	東海大学湘南第 3 号館新築工事
8	1967	A1	28	東海大学湘南望星学塾食堂浴室新築工事
9	1968	A1	22	東海大学湘南校舎５号館新築工事
10	1969	A1	26	東海大学湘南校舎第 7 号館新築工事
11	1969	A1	26	東海大学湘南校舎９号館新築工事
12	1970	A1	48	東海大学湘南第 8 号館新築工事
13	1970	A1	22	東海大学湘南校舎６-A号館新築工事

4 湘南キャンパス青焼き図面の分析

4-1 湘南校舎図面 13 点全体を通して判ること

ここで残された青焼き図面（表 4）を使って分析を試みることにする。まず 13 点全体を通して分析すると以下の項目が指摘できた。

1，タイトル書式（図 9，10）

・形状に 2 タイプ確認できた。便宜上Ａ，Ｂタイプとする。

・事務所所在地について行政の住居表示整備による新旧 2 通り表記がある。

・日付は殆どが未記入になっている。

・山田守死後は設計者名が息子の達郎表記に変わっている。（山田守生前の設計としても，死後は法規上変更の必要があり，この記載が設計者を特定するものではない。）

・ナンバリングの方法が一定していない。

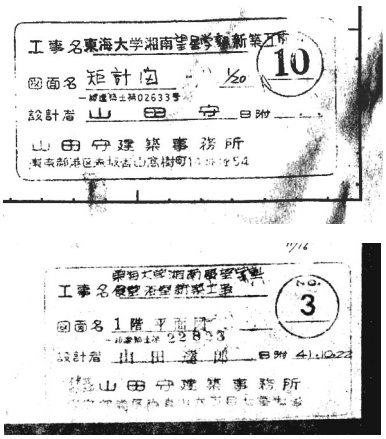
2，図面のサイズ

・殆どがＡ１サイズを使用しているが，松前会館（表 4･NO5）のみ A2 サイズを使用している。

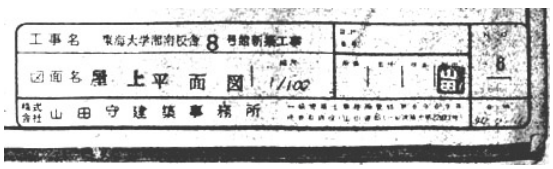
3，全体の印象

・円形食堂（表４・NO8）のみ番号・必要図面・日付などに落ちが無く，整っている印象がある。

これらの指摘により山田の没前後で変化が見られる事が判明した。項目毎の事案は個別に研究して行く必要がある。



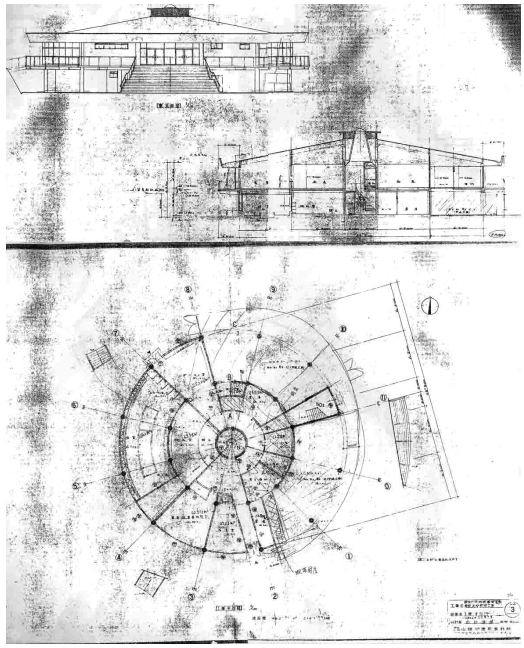
【図９】［タイトル書式Ａ］
上／表 4・No2 の例　設計者；山田守　所在地；赤坂青山高樹町　項目；工事名・図面名・設計者・日附・ＯNo・縮尺欄
下／表 4・No8 の例　設計者；山田達郎　所在地；南青山六丁目　項目；同上



【図 10】［タイトル書式Ｂ］
表 4・No12 の例　項目；工事名・図面名・縮尺・設計番号・所長・主任・担当・製図・No・日附

4-2 校舎毎の図面から判ること

校舎毎に図面を見ても幾つかの現状との差異が発見された。例えば円形食堂（工事名；東海大学湘南望星学塾食堂浴室新築工事）では１階平面図や断面図（図 11）の記載で東側前面部が大きく開けられピロティとなっているが実際にはスチールサッシで囲まれた軽食堂となっており（図 12 右），図面にもそれを表した鉛筆による書込みが確認できる。図面の日付が死後であることから，これが山田守自身のものでないことは明らかであろう。現状調査からサッシ上部の取り合いに，仕上げモルタルの削った痕跡があり，このサッシ追加が竣工後のものであることが判明している。[*3]



【図 11】円形食堂図面（鉛筆による加筆が見える）
上；立，断面図（一部）　下；１階平面図

【図 12】円形食堂外観　右；東側正面　左；ピロティの計画だった部分

他の山田作品にピロティが使われた例は見られないが，当時流行のボキャブラリーとして山田も十分意識していた事が明らかになった。

5 まとめ

残された図面の分析を進めていくことにより，山田の設計活動の実情や，現存建築でも実現していない山田守の真意が明らかになることが判明した。

山田は若き日から晩年まで絶えず挑戦し，時にはその斬新さから世間の批判を浴びながらも黎明期の日本近代建築史に偉大な功績を残した。近代建築が見直される昨今において，山田の功績を位置づけることは，日本における近代建築を再評価する上でも重要である。

今後の課題と展望としては図面分析，現況調査だけでなく，誌上での発言や旅行の記録，散逸した図面の追跡を加え，更に検討を重ねて行く予定である。

（本研究にあたり，資料整理や現地調査において本学住居学科学生の瀬戸理恵子および湖本香奈絵の協力を得ることが出来た。この場を借りて謝意を表す。）

注釈

＊1；中真己著 「現代建築家の思想　丹下健三序論」近代建築社 1970

＊2；京都タワー問題では朝日新聞が 1964 年 7 月 26 日付文化面「建設という名の破壊」等，反対の論陣を張った。建築界でも激しい論争が起こった。

＊3；拙著「山田守による東海大学湘南校舎およびその設計図面について」2005 年 3 月日本建築学会関東支部研究会

参考文献

・向井寛著 「建築家　山田守」　東海大学出版会 1992
・モダニズムジャパン研究会編 「再読日本のモダンアーキテクチャー」 彰国社 1997
・吉田研介著 「建築設計競技選集 2」メイセイ出版 1995
・山口琢也著 「山田守設計の「東京逓信病院」に関する研究」 東海大学大学院修士論文 2004
・山田守建築事務所ホームページ

【表６】山田守年表

西暦	山田年齢	事柄
1894	0	4 月 19 日岐阜県羽島郡上中島村字長間に生まれる。
1920	26	東京帝国大学工学部建築学科卒業。
		分離派建築会を組織
		逓信省営繕技師
1925	31	東京中央電信局竣工。
1928	34	復興院 橋梁課委託となり永代橋、万代橋など隅田川６大橋及びお茶の水聖橋の設計に関与。
1937	43	東京逓信病院竣工。これに対し逓信協会賞を受ける。
1940	46	逓信省営繕課長に就任。
1941	47	東海大学前身の航空科学専門学校設立準備に関わる
1944	50	勲三等瑞宝章を受ける。
1945	51	逓信省退官
1949	55	山田守建築事務所を東京湯島に開設。
1951	57	東海大学理事に就任、工学部建設工学科主任教授を兼ねる。
1953	59	東京厚生年金病院竣工。これに対し文部大臣賞を受ける。
1954	60	大阪厚生年金病院に対し建築学会賞を受ける。
1957	63	逓信建築の功労に対し前島賞を受ける。
1957	63	長沢浄水場竣工。
1962	68	東海大学湘南校舎の建設始まる。
1963	69	東海大学湘南校舎 1 号館竣工
		日本武道館の設計競技に当選。
1964	70	藍綬褒章を受ける。
		日本武道館竣工。
		京都タワー竣工
		東海大学湘南校舎 J 館・2 号館竣工
1965	71	勲三等旭日中綬章を受ける。
		東海大学湘南校舎で校舎３棟竣工
1966	72	6 月 13 日関東逓信病院において逝去。設計事務所は息子達郎氏に引き継がれる。
		東海大学湘南校舎で校舎８棟竣工